

東京二期会オペラ劇場

## オペレッタ『チャールダーシュの女王』の楽しみ方 ～第3幕～

田尾下 哲(演出)

再び休憩を挟んで、いよいよ最終幕、第三幕です。

1914年6月27日(土)。ウィーンのヴィンケルバウムホテル。豪華ではないですが、貴族たちに好まれているホテルで、特に家族を連れずにウィーンにやって来た貴族に好まれているというホテルです。2幕終了から15分後の真夜中が舞台になります。

### ●13 ½ 「三幕への前奏曲」

夜空を眺めることが出来るホテルのロビーに、オルフェウムの引っ越し公演でウィーンに来ているフェリとダンサーたちもやってきます。

そこへ公爵の館を辞したシルヴァとボニが駆け込んできます。エドウィンは自分のことを恥じていたのだと大荒れのシルヴァですが、フェリの姿を認めて偶然の出会いを喜びます。もうヨーロッパには戻ってこないのではと思っていたフェリは仲間を呼び、仲間たちも大喜び。ですが、シルヴァはもう劇場へは戻らない、ボニと結婚するから、といいます。驚く一同ですが、フェリは二人だけにして欲しい、と一同に請います。ボニはシルヴァをフェリに託し、自分に出来ることを考えます。

二人きりになり、エドウィンのことで傷ついているんだね、といわれてもシルヴァは心を閉ざしたまま。男爵であるフェリには自分の気持ちは理解できないと思うのですが、フェリは語り続けます。

フェリ 「私も経験をしたことがある。身分違いの恋ってやつをね。その時はどうしようもないと思って、別れた。でも、今は後悔してる。君にはそういう思いはして欲しくないんだ。それに、結婚するからって歌をやめるのは、芸術にとって損失だ。君は誰か一人の男のものじゃない、劇場のものだ。そうだろ？」

シルヴァ 「劇場がなくても、エドウィンがいなくても、幸せになってみせるわ。」

フェリ 「本当にそうか、シルヴァ？忘れられないはずだ、舞台上、スポットライトに照らし出される瞬間のことを。」

シルヴァ 「…」

フェリ 「全てが突然、静まりかえる。そして、全ての観客の目が、特に男性の目が、君に釘付けになる。…君が歌い始めると、その歌は全ての人の心をつらえ、幸せにする。それがチャールダーシュの女王、シルヴァ・ヴァレスクだ。」

フェリの胸でむせび泣くシルヴァに劇場に戻ってくるようにいうフェリ。ですが、シルヴァはもう心が折れて、そんなことは出来ない、といいます。フェリはボニと仲間を呼び、シルヴァを励まします。「無理かどうか、試してみよう。みんな、用意はいいか？チャールダーシュの女王が、皆の力を必要としている。ほんの少しだけ、背中を押してあげるんだ！」そう、『チャールダーシュの女王』の中でも最も有名な曲「ヤイ、ママン」です。

#### ● 14番 「ヤイ、ママン」

(シルヴァ、フェリ、ボニ、ソプラノ、ダンサー)

シルヴァの帰るべき所は舞台だ！皆がそう歌い、シルヴァも元気を取り戻します。友情と音楽の力…シルヴァには大切な仲間と音楽が、芸術があるのです。

そして、今度はボニの番です。ボニは、エドウィンと公爵夫妻をこのホテルに呼び出していました。まずやって来たのはエドウィンです。ですが、エドウィンは酷い剣幕でボニに怒っています。シルヴァと立ち去った後に残された自分たちがどうなったと思うんだ、と詰め寄るエドウィン。シュターズィのことをどう思っているか聞かれたボニは答えます。「愛してる。本気なんだ、エドウィン。この騒ぎが済んだら、結婚を申し込みたいと思ってる。」この言葉を聞きたかったエドウィンは、ボニの思惑を超えて、シュターズィを連れてきていたのでした。シュターズィが通されます。熱い愛を打ち明け、プロポーズをするボニですが、シュターズィはエドウィンとシルヴァのことが解決するまでは約束できない、といいます。ボニは大丈夫、秘策があるといいます。でもその前に…

#### ● 15番 「いいかい、君～それが恋の皮肉」

(シュターズィ、ボニ)

勇気づけに甘いキスを、と求めるボニに、シュターズィは優しいキスをします。そこへエドウィンが頃合いを見計らって帰ってきます。二人の仲睦まじい様子に喜ぶエドウィ

ンに、今度はボニのお返しの番です。ボニはエドウィンに両親を呼んであることを告げ、エドウィンとシュターズィに隣の部屋で待つように言います。館での婚約破棄のスキヤンダルに怒り心頭の公爵は、ボニを咎めます。シュターズィのことならご安心ください、僕が新たな婚約者になりますといい、公爵にはこれから来る人とお話ししていただきたい、と言い残し、立ち去ります。何のことやら納得のいかないままに、公爵はフェリと対面します。初対面のフェリがエドウィンの友人と知り、公爵は明らかな不快感を示しますが、フェリはエドウィンとシルヴァの結婚を認めるように論じます。自分の家柄にはそんなことはあり得ない、と語る公爵に、フェリは下級であっても男爵である自分がずっと後悔している恋愛話を始めます。

フェリ 「お言葉ですが、私も下級かもしれませんが、貴族です。そして、その身分の差のために、愛した女性と結婚できず、その間違いに気づいた時には、その人は人妻になっていました。未だにそのことを引きずって、独身を通しています。」

公爵 「随分けなげな話だが…その相手も芸人だったのかね？」

フェリ 「はい。その頃、ミスコルツの舞台に出ていたプリマドンナを私は崇めていました。今でも写真を肌身離さず持っています。結婚は出来ませんでした、彼女を愛したことは私の誇りです。」

フェリはいつも持ち歩いている一枚の写真を公爵に見せます。すると公爵はみるみるうちに顔色が悪くなって…。

フェリの愛した女性とは誰だったのでしょうか？…ここから物語は急速に展開していきます。そして、ボニの秘策とは？シルヴァはこれからどうなるのでしょうか？エドウィンは？…オペレッタ特有のハッピーエンドへの加速がここから始まるのですが、そのハッピーエンドへの持って行き方が、それぞれの作曲家の腕の見せ所です。カールマンの『チャールダーシュの女王』がどのような幸せを皆様に届けてくれるのでしょうか、是非劇場で見届けてください。日生劇場で心よりお待ちしております。